

♪ 2020年度 **poco a poco** ♪

Nr. 9 2020年9月14日(月)

文責:プファイル・辰巳

音楽室の模様替え!?

今年度はいろいろ理由があって、音楽室を少し模様替えしました。大きく変わったことは授業を受ける向きです。

今まで舞台のある方に向けて授業をしていましたが、今年度は逆向きで授業をしています。最大の理由はピアノのためです。舞台上のピアノをこれまで酷使してきた

ので、少し休ませてあげる必要が出てきました。後ろに置いてあるピアノと入れ替えようか、とも考えたのですが、ピアノのサイズが違うので入れ替えるとまた別の問題が出てきそうだということ、子どもたちの気分転換にもなるだろうということ、などを考え併せて、今年度は机の向きを変えてみました。つまり、舞台と反対側の黒板に向かって、現在子どもたちは座っています。

今のところ結果は上々、特に支障もなく各学年とも授業を進めることができている。ミニコンサートやスピーチコンテストなど行事が開催されるようになれば、これまで通り舞台を使ってやることになるかと思いますが、普段の授業はしばらくこの形で続けます。保護者のみなさまもお知りおきください。

音楽こぼれ話 <大作曲家の家族たち ⑪>

ワーグナー家とバイロイト音楽祭>

まずは先号の訂正から。前回、これまでの連載内容を振り返った時に、大事な「⑨ベートーヴェンの家族」を数え忘れておりました。ですから、前回のメンデルズゾーン家のお話が第10回、今回のワーグナー家のお話が第11回目となります。失礼しました。

リヒャルト・ワーグナーは1815年にライプツィヒで生まれたドイツ・ロマン派を代表する作曲家の一人です。リストの娘で第2の妻となったコジマとの大恋愛やバイエルン



王国の狂王と呼ばれたルードヴィヒ2世との関係、そしてヒトラーがワーグナーの音楽愛好者だったことなど、とにかく話題になることが多々ある作曲家でした。

先述のルードヴィヒ2世は同時代に生きたワーグナーの音楽に心酔しており、ワーグナーを惜しみなく援助しました。そのお陰で、バイロイト祝祭劇場の建設が実現したのが、1876年のことでした。ワーグナーの楽劇の上演のためだけに、彼の望み通りに建てられた劇場です。ここで始まったバイロイト音楽祭は、脈々とワーグナー家に引き継がれ、現在でも世界的に有名な夏の音楽祭開催地になっています。

バイロイト祝祭劇場ではワーグナーの曲しか上演されないと先ほど書きましたが、実は1曲だけ例外があります。それは、ベートーヴェンの第9交響曲の中の「歓喜の歌(よろこびの歌)」です。この曲だけは、劇場完成のこけら落としの時に演奏されました。祝祭劇場はワーグナーの死後、まず妻のコジマが運営を引き継ぎました。さらに息子ジークフリート、その夫人のヴィニフレートへと順に引き継がれていきます。ここで第2次世界大戦となり、大戦後は一時、劇場はアメリカ軍に接収されました。ワーグナー家に返還されたのは1951年のことでした。音楽祭も再開され、そのお祝いの席では、ベートーヴェンの歓喜の曲も再演されました。

戦後は長らくワーグナーの孫であるヴィーランドとヴォルフガングが劇場の運営や演出、総監督を務めていました。特にヴォルフガングはかなりの長命だったので、その実権を非常に長らく握り続けていました。彼の後継者は誰になるのか話題になった時期もありましたが、現在はワーグナーの曾孫であるカテリーナ・F・ワーグナーがバイロイト音楽祭の芸術監督と運営理事を引き継いでいます。彼女は1978年生まれといえますから、未だ若干42歳。今後の活躍が期待されます。

コロナ対策のため、バイロイトでも劇場内での楽劇の上演は見送られた2020年でしたが、それでも各地から集まってきたワグネリアンや地元の人々のために、オーケストラ団員が野外演奏会を自主公演している姿がテレビで報道されていました。

来年はバイロイトに限らず、夏の音楽祭が再開されること祈るのみです。そしてワーグナー家がどのようにバイロイト音楽祭を継続していくのか見守っていきたいと思います。



ほんのちょっとだけ 演奏会情報

ヴィースバーデン歌劇場でも演奏会が始まりました!

詳しくは [www. Staatstheater-wiesbaden.de](http://www.Staatstheater-wiesbaden.de)